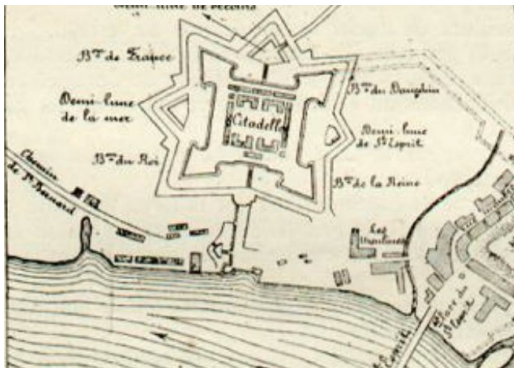
国際社会学部

芹生尚子

Seriu Naoko
コース／地域社会研究コース
歴史学（フランス史）



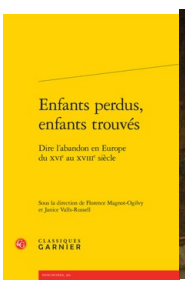
フランス近世とは

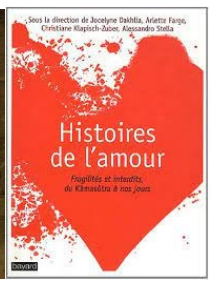
専門は近世フランスです。中世の終わりからフランス革命（1789年）までの約3世紀にわたる時代を近世と呼んでいます。印刷革命を背景にルネサンスや人文主義そして宗教改革の展開をうながしたヨーロッパ近世は、宗教的相剋が内乱や戦争に発展した時代でもあります。フランスでは宗教戦争に終止符を打ったブルボン家の国王たちのもとで、絶対王政と呼ばれる政体が誕生し、王権による行政機構の整備、法慣行や訴訟手続きの統一、文芸の保護、都市改造が進展します。今日の「六角形」をしたフランス本土の国境がほぼ定まり、公文書作成の際のフランス語の使用が義務付けられます。対抗宗教改革とプロテスタントの迫害が行われた17世紀に続く啓蒙の世紀には、さまざまな文人やフィロゾーフが社会の前景で活躍し、宗教的寛容、自由、幸福、愛といった価値の重要性を強調し、人権概念の形成に寄与しました。
同時にまた、近世を通じて奴隷制が徐々に制度化されていったことも忘れてはなりません。

研究紹介

近世フランス研究とくに18世紀研究を中心に、民衆層の人々の経験について研究しています。身分社会の底辺に生きる多数者は、生活世界のなかで、さまざまな人々との関係性そしてさまざまな制度や権力との関わりの中で、何を感じ考えどのように身を処したのでしょうか？そこにどのような苦しみや喜びがあったのでしょうか？このような素朴な問いに答えるべく、裁判文書に書き留められた言葉に耳を傾けながら研究をすすめてきました。アンシアン・レジーム期の人々がほぼつねにかぶっている「帽子」という「もの」の意味や機能、ある未婚の母とその娘の別れと再会、ある女性兵士の軌跡、貧しい民衆を兵士として統合する軍隊の改革、改革期の軍隊から脱走した人々の体験といったテーマに取り組んできました。

感情（子供への感情、家族間の感情、男性間の友情、身分をめぐる感情）に関する研究





担当授業

- フランス史概説
- 近世フランスにおける民衆の経験を考える
- 18世紀学への誘い
- メディアの伝えるフランス社会
- 啓蒙の世紀における世論とそのアクターを考える

関連する分野

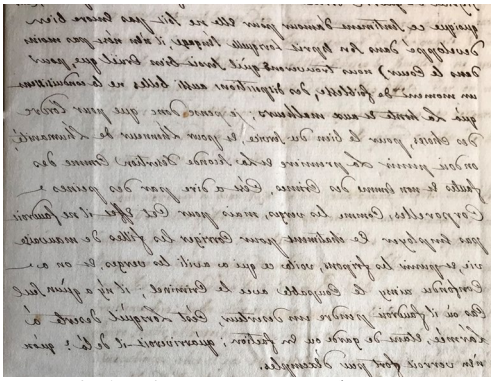
- 18世紀研究
- 感情史
- 軍事史
- 史料論

出版物

- 「啓蒙の世紀と軍事改革」
- 「18 世紀後半フランスにおける脱走兵の処罰をめぐる論争と改革」
- “Deserters’ voices on childhood and emotion in eighteenth-century France”
- 「帽子をめぐる暴力」

国際社会学部

フランス史研究ゼミ



七年戦争後の改革の時代に将校が書いた提言書（フランス国防省文書館）

どのようなゼミか

本ゼミは、近世・近代フランスの歴史、近現代フランスにおける記憶と歴史学を対象にしています。絶対王政の成立をみたアンシアン・レジームと呼ばれる時代から、フランス革命以降第一次世界大戦に至るまでの「長い19世紀」を経て、第二次世界大戦に至るまでの時代を対象とします。その後の時代については、主に、歴史叙述の歴史（ヒストリオグラフィ）や記憶の歴史学に関して対象といたします。空間的には、フランスまたフランスと密接な関係をもつヨーロッパ諸国またその他の地域も射程に入れます。

歴史学の歴史を辿れば、歴史を書く営みが、ながきに渡り、為政者、エリートまた男性中心に行われてきたことが分かります。名も無い人々の生活はどのようなものだったのでしょうか？彼また彼女たちの感情や経験をどのように可視化し意味づけを行っていくことができるのでしょうか？　例えば、日記や手紙そして訴訟文書から何を読み取ることができるのでしょうか？　このような問いに関心のある方は、ぜひゼミの扉をたたいてみてください。

ピーテル・ブリューゲル（子）『村の法律家』：壁には多くの「訴訟袋sac à procès」―訴訟文書が収められた麻袋―が掛けられている。当時の裁判の記録は、貴重な史料として今日なお文書館に保存されている。

卒論

- 20世紀への転換期のフランスの新聞3紙におけるイギリスへの意見の変化
- 近世フランスのメナジェリーから考察する現代の人間と動物の関係
- 芸術は現実の労働問題の解決に貢献しうるか―『レ・ミゼラブル』の登場人物であるファンチーヌに注目して

おススメの本

- 二宮宏之『全体を見る眼と歴史家たち』
- ナタリー・デーヴィス『帰ってきたマルタン・ゲール』
- ロバート・ダーントン『禁じられたベストセラー――革命前のフランス人は何を読んでいたか』
- A・ファルジュ, J・ルヴェル『パリ1750：子供集団誘拐事件の謎』
- 工藤光一『近代フランス農村世界の政治文化』